

男女の交わりは減点法（1） 『付き合った時点をピークと仮定したときの自分ブランディング論』

第3期OB 田中 成幸

同僚との会話の中で指摘されたことなのだが、どうも自分は付き合う前と付き合ってから態度が豹変するらしい。

ぶっちゃけ薄々感じていたので特に大きな驚きもないですけど。それに、ちょっと考えたら、正直ほとんどの人がそうなんじゃないか。自分に限ったハナシじゃない気がする。皆さんそう思わないだろうか？これは俗にいう「合コン」と呼ばれるイベントに参加した自分の経験、友人が喜々として語る異性との接触についての武勇伝の内容などを聞いた経験などからそう思うのだけど、男も女も、これはと思った相手を見つけるまで、そして見つけてから「落とす」までの期間の基本戦略というのは、「自分のウリ（他者と比較したときの比較優位性のある特徴）を並べ立てて相手が自分と付き合う事で得られると期待される利得を最大化すること」なんじゃないだろうか。

卑近な例を挙げるとするなら、合コンの自己紹介で「自分、寝起き悪いので、そのときに起こされると基本的にはキレます」とか、「自分のことをどれだけ優先してくれるかが相手の価値だと思ってます」とか言ってる奴は見た事がない。ちなみに、筆者の友人の中には、「幸の薄そうな顔の人が好みです」という一見逆効果な台詞を吐くことで相手の「え、どういうこと（若干怒）」な反応を引き出し、そこからハナシを盛り上げていくという高等戦略を駆使する人間もいるが、これは例外だし、そもそも成功しているのを見た事がない。というか、従って、高等戦略ではない。

自分を相手に見せる／魅せる。その瞬間は自分が理想的な人間であることをアピールすることは男女の分け隔てなく共通である。次行く合コンからは是非検証していただきたい。筆者は2年にわたる小野ゼミでの生活でポパーの考えを知り、支持するようになった。反証されることは自分の仮説の次のステップに至るための必要な試練だと思っている。反証例があれば是非ご一報いただきたい。

さて、合コンなどにより相手の注意・興味をひくことに成功し、幸運にも2人でデートするというチャンスを得た人々は、引き続き自分の良い面を全面に出すことに全力を傾ける。地理的にも知識的にも最も自分が魅力的だと思われるようなフィールドを選択し、そこへ相手を誘導していくのが基本戦略だ。

例えば、ファッションが戦略的に「刺さる（筆者が勤務する会社のスラッグの一種。相手のニーズにマッチするの意）」と思えば主戦場は原宿や青山、少し通人ぶるなら代官山から中目黒一帯をチョイスして、服装にも気を使い、色彩に関する持論でもって武装するかもしれないし、マニア感を打ち出したいならsoftbankのpantone全色を鞆に忍ばせて相手を迎えるかもしれない。また、食の造詣の深さで相手を落とすというのであれば、自分が懇意（「顔パス」という間柄を見せることは大きなアドバンテージである）にしている店を選び、出される皿について気の利いた説明を加えて、同じものを食べ、「おいしいね」という確認作業を行えばそのデートのミッションは成功と言える。このとき、事前に店の人とハンドサインの1つ

でも共有しておけば成功は貴方のもの、二次会への道はほぼ成ったと言っても過言ではない。

例示が多くなってしまい、話の核心が曖昧になってしまった。ここまでで言いたかったことを簡単にまとめると、つまり、付き合うという状態に至るまで、人は相手のいい面を見る機会ばかりに恵まれることになる、ってことである。相手が提供する情報は、とくに外的な要因が加わらない限り、相手にとってのポジティブなもののみで構成される。まれに、デート中にガラの悪い男性の靴を踏んでしまったり、大量のアルコールの摂取で、懸命に発揮してきたパフォーマンスに意図せぬ「揺らぎ」が生じたりすることもあるけど、まあそれは例外で、自分の不運を世界の中心で叫ぶか、自分のアルコール分解酵素の少なさを自覚していなかった不明を責めるしかない。

さて、一組の男女が晴れて特定の関係になれたとする。それは言語的に唯一の関係の人間であることが担保されたか、物理的にそいつと初めて肉体的な男女の接触に至ったか、大抵はそのどちらかである。そして、その瞬間こそ多くの男女にとって幸せのピークの最高峰、幸せのエベレストであると僕は思うわけです。ってか、実際そうじゃない？ いや、ホント、本音ベースで振り返ってみてさ、相手が OK してくれた時が一番グッとときません？ 急に口語になったあたり、筆者の仮説のロバストネスについての不安感の表れですけども（自分の仮説体系の脆弱な部分について自ら暴露する人は殆どいないので、社会・アカデミー界に出たら気をつけましょう 笑）。グッとくるってのは、大脳生理学的に言えば、脳内で快感物質が普段よりも大量に分泌されているって解釈できるわけです。生き物がこの世に発生して何十万年、ワトソンとクリックが見いだした二重螺旋構造のシステムの中に連綿として綴り続けられてきた情報が、この瞬間を脳内麻薬の分泌量のピークに選んだことには生物学的な意味があると考えべきじゃないだろうか。それは、子孫繁栄のための相手を発見してゲットすることが、これまでも、そして多分これからも、個体のライフタイムの中で最も重要なことだということだ。

とすれば、この世の男女は皆ハンターなのだって言っちゃうこともできる。付き合うまでの過程というのは、獲得するまではスポーツであり、理想の自分を演じてたった一人の聴衆に魅せるための舞台であり、異性というプライズ、もしくは垂涎の獲物を獲得するための猟場なのである。少し前（沈静傾向にあるが今も）に間を埋めるために提示される鉄板ネタであった「草食／肉食」の議論はそういう意味で的を射ていないと思う。だって、草食系男子はその社会不適合性をアピールすることが異性にモテるから、草食系男子であろうとするのだ、って見方だって出来るのだから。それは彼らの 強かな生存戦略であり、そうして異性を獲得するからには、結局言うなれば彼らもハンターの類なのである。狩っていると自らの狩りの能力を誇る肉食系女子は実は彼らに狩られている可能性について考えるのも一興（一驚？）かもしれない。自分が草食系男子というチョウチンアンコウのかい口の前にちらつく行灯に誘引された小魚だったのか、と愕然とした方も中にはいらっしゃるのではないだろうか。いや、それも見越して私が食ってやったのよ、と言われる方がいれば、それはもう拍手、何も言わずにただ拍手です。

で、特定の関係になるという生物としての最大の関門をくぐった後の 2 人の関係というのは、前述の比喩を使うのであれば、スポーツ大会後、閉幕後の舞台、食料が潤沢にある状態の後に訪れた猟場である。その風景を想像して、自分がどのように振る舞うかを想像してみれば、その後の男女の交わりがどのように展開するかを予測することは決して難しいことではない。

シンプルに言うと、ダレるよね、ってことです。

これまで秘匿されてきた各人のネガティブな部分が、弛緩した精神／肉体から漏洩するのがここからの時期なわけです。この時期に、「驚天動地」、「寝耳に水」、「寝起きに顔面パイ」、「同時多発テロ」などなど、ありとあらゆるネガティブサプライズ系の表現をもって語られるエピソードが発生します。

相手への落胆と絶望と、あと隣の芝、じゃないオトコオンナが青く、じゃない魅力的に見えてくることによる自己嫌悪に彩られる最悪の時期とも言える。

一昔前のピタピタの全身タイツを着用した筋肉質のアメリカンヒーローや、超絶した寛容性を持つ想像上（えてしてマンガなどの紙媒体上に顕現する）の存在のみが、この期間においても、自らのアイコン性を維持可能ですが、そんなもんいないと喝破したっていいくらい、ありえない。せいぜいが、自分のマインドセッティングを変更して、こんなところもまたいいんだ、あばたもえくぼだ、と自分を納得させるぐらいである。痛覚が快感に変わるというのは、心理学的な知見が蓄積されているけど、精神的なストレスを快と感じられるようになる心理学的な知見を見たことが無いので、そこらへん、知ってる人がいたら情報共有よろしくです。

この、ポスト関係成立期、生物学的な満足感のピークを下山する局面は誰にとっても不可避。一度ピンと張ったものはいつしかダレるのです。そのことを所与として受け入れられる2人は強いが、なかなかいないですね。怒ること、喧嘩するなどの行動によって下山を拒否すると、その行為自体が山を崩落させる発破となることを認識している人はもっといないですね。

とまあ、「おまえ誰かにフラれたろ？」と言われかねない内容を書き綴っているわけですけども、逆に特定の関係になった後こそが、相手の本質を理解するために用意されたバッファ期間という見方もできると思います。普通の関係と「病めるときも貧しいときも尽くさないといけないストイックな関係」との間のグレーゾーン。そう思えば「付き合う」という関係性を創りだした（つか、言語化して切り出した）のは、人間の叡智の結晶のようにも感じられないですかね。

そして、その期間こそが、相手のダメな部分を見て、それを割り引いてもその後の関係を持続させて子孫繁栄のステップを共に踏み出すのか、さっさと次の獲物を狙うかの判断を考えられる貴重なタイムゾーンなのではないだろうか。

ここでようやく表題の件。男女関係は特定の関係を結んだ後は、減点法が適用されるってやつ。上記グレーゾーンの時期は、基本的には全力でいいトコ見せた自分像がどんだけ劣化を免れるか、そういう期間です。

採点対象はその相手。

採点基準は相手の理想の状態。

つけられる点数はその理想と現実とのギャップ。

私と周囲の人間のとるに足らない情報から考えると、男女のわけ隔てなくダレる時期ですから、気を抜いていると採点は恒常的に「理想>現実」の関係が成り立ちます。ので、それまでの相手の評価にマイナスの修正を付け加え続けるというのがこの時期の特色のようです。おーこわ！

満足度の例に例えるなら、お互いに下山する姿をちら見しながら、2人は下っていく感じですね。登頂すれば下山があります。頂上にとどまり続けることはできないわけです。時に一步一步、時に駆け下りるように。そのプロセスは誰もが辿らなければならないものだと思います。しかし、登山口まで帰って来た

ら終わりになってしまいます。あるいはもっと早く、六合目あたりで別々の登山道を下ることになるかもしれない。でも、それは避けたい、と思うのが人情というもの。では、どうすればよいのか！？

...と、つらつら書いてみましたが、紙面の関係でこれ以降は割愛ってことで。異論反論は是非筆者にお寄せください。ここまで読んでくれた小野ゼミ生ならきっと話が合うはず！ なんとって自分と他者の意見が違うのは当たり前。それをコミュニケーションで埋めていく、お互いがより良い状態に到達するためのベストエフォートな解決策を模索する。それが小野ゼミで身につけることのできる重要な姿勢の1つだと思いますから。

恋愛だって、就職活動の面接だって、会社入社後の営業だって、結局これが必要なんです。というか、これさえあればいくらでも自分の活かしようあるってくらいな。そんなチカラを、小野ゼミで頑張ればどの人も自分のモノにできます。一緒に、男女が下山の歩みを緩めるためのベストな戦略（など）について議論しましょう（当方切実！）。

そして、言いたいことはあるけれど、自分の意見をぶつけることに二の足を踏んでしまう貴方。筆者の経験上、そんな貴方が大学3年生だったら要注意です。

興味を持ったり、「それ、何故？」って思ったりしたら、その相手に話を聞きに行く、そういう行動力が、これから現役生がぶち当たる就職活動や、その後の自分のキャリア形成の上では凄く大事です。かく言う筆者は大学3年、理転して後の大学院1年、留年して後の3度目の正直の大学院2年次の計3回就職活動をしましたが、100社ぐらい説明会などに行って、20人以上OB訪問した3回目の就職活動が一番成果が上がりました。そこらへんの身の振り方について興味がある方は是非勇気を持って筆者にコンタクトを。筆者が勤めている会社はOB訪問対応がかなり優先されますので、お話ししっかり聞けると思います。

自分の就職活動について言えば、本音を言うと、3度目は景気がかなり良く、経済状況の御陰と言われれば、それもあるよね、という答えにはなります。

恐らく今後日本が劇的な成長を遂げて繁栄を謳歌する時期が来る可能性は低いと思います。日本の財政状況、政治やマスコミの情報発信による日本の消費者に与える心理経済学的な影響、これまで日本の優位性の源泉であった製造業の今後のポジショニング、実は凄くことになっている若者の問題・貧困の問題...。これらを考慮すると、日本の未来は決して薔薇色なんて言えない状況です。

でも、見方を変えれば機会ととらえることだって一杯ある。段階の世代は日本に古今まれに見る世代交代のチャンスをもたらすし、日本の農業における新しい生産のあり方が各地で成果を挙げ始めている。はたまた日本のファッションやアニメ、アートはフランスで20万人を動員している...。ネガティブな面にばかり注目せず、ポジティブな面にも光を当てて、アバンギャルドな世界へ飛び込むことを留めようとする世間を振り切れれば意外にキャリアがうまく回るって目だってありえます。

僕の場合、世の中のいろいろなことに目を向けるきっかけ、その一番土台になる消費者行動論、マーケティング論という視点というのは、全部小野ゼミでもらった気がします。この場を借りて、小野先生ご夫妻そしてご子息の方々、先輩・同期・後輩に御礼を言いたいと思います。本当にありがとうございました。（感涙滂沱）！！！！

そんな、原稿締切の前日、というか当日午前3時。